

埴輪生産と須恵器工人

—奈良県ウワナベ古墳の須恵器を中心にして—

植 野 浩 三

はじめに

奈良県ウワナベ（宇和奈辺）古墳では、かつて古墳の造出し部より埴輪・須恵器・土師器・土製品が採集されている。⁽¹⁾特にこの中で、須恵器は赤褐色系の塗彩が施され、焼成は硬質であるが、赤色系に土師質風に仕上げられたもので、通常の須恵器とは異なる点で注目されていた。焼成・塗彩・胎土については、埴輪と共通することが指摘されており、須恵器と埴輪が同時に製作・焼成された可能性を示唆した。古墳造営における埴輪の窯焼成は、全国的なごく一般的なあり方であるが、須恵器を同時に赤褐色に彩色して埴輪風に製作・焼成したものは例がほとんどなく、古墳造営における窯業部門の体制等を検討する資料としてきわめて重要である。

また、塗彩された須恵器は、造出し部において祭祀に使用された可能性がきわめて高い。恐らく古墳祭祀の一環を担う物品として、埴輪

と同時に古墳の近辺で生産された可能性がある。そうすると、ウワナベ古墳造営に関連する窯業操業は、埴輪の生産以外にも、古墳の祭祀用品の生産、さらに拡大解釈すれば直接・間接的に祭祀の役割も分担していたと推測できるのである。

筆者は、かつて初期須恵器が古墳の祭祀において多用されることに注目し、地方窯の成立は、地方豪族の須恵器への強い憧れとともに、古墳祭祀における須恵器の必要性、窯業の埴輪生産への有用性等と有機的に関係してなされたと考えたことがある。⁽²⁾須恵器と窯業、窯業と埴輪、埴輪と祭祀、祭祀と須恵器とは、それぞれにおいて密接に関連しており、古墳造営を頂点とする図式が描かれるため、こうした造営を契機にして行われた可能性を説いた。同様の見解は、田辺昭三氏や増子康真氏によっても提唱されているが、資料的な制約もあって、⁽³⁾具体的な検討には至っていないのが現状である。

したがって小稿では、こうした問題を解く手掛かりをもつウワナベ古墳採集の埴輪と須恵器を例に取り上げ、埴輪生産と須恵器、須恵

器生産と埴輪、古墳の造営と窖窯（須恵器窯）との関係について検討し、さらに古墳築造と地方窯の成立の關係について迫りたい。特に、ウワナベ古墳を基準にするために、小稿では全国的な考察には届かないが、今後の展開を方向付けることを主たる目的にする。

一、ウワナベ古墳の概要

奈良県ウワナベ（宇和奈辺）古墳は、奈良盆地北縁の低丘陵に造営された佐紀・盾列古墳群に所属する大型の前方後円墳である。現在の行政区画で言えば、奈良県奈良市法華寺町に所在する。佐紀・盾列古墳群は言うまでもなく、大型の前方後円墳を多数含む古墳群としては全国的に屈指のものである。古墳群は西方の神功皇后陵（五社神）古墳、成務陵（佐紀石塚山）古墳、日葉酢媛命陵（佐紀陵山）古墳に代表される一群と、ほぼ中央部に存在する市庭古墳、そして東部にある磐之媛命陵（ヒシヤゲ）古墳、コナベ古墳、ウワナベ古墳等がある。さらに東方には、不退寺裏山古墳や那羅山古墳が存在しているが、便宜上、佐紀・盾列古墳群の中には含まない。こうした古墳は、おおむね前期後葉から中期後半にかけてのものであるが、それ以降に続く古墳も確認されている。

ウワナベ古墳は陵墓参考地に指定されているため、古墳の内容は不明な部分が多いが、外観や古記録および外堤部の調査等⁽⁴⁾によってそ

の一部を知ることができる。時期を知る資料としては、外堤部出土の埴輪の他、周濠部採集の遺物がある。

ウワナベ古墳は、前述したように佐紀・盾列古墳群の東端に存在している。緩やかに南方に下る台地を利用して築造された前方後円墳であり、前方部を南側（平野部）に向けている。墳丘は全長二五メートル、前方部幅二二九メートル、後円部径一三〇メートル、高さは後円部、前方部とも一九・六メートルを測る。墳丘は三段に築成され、各段に埴輪を巡らしており、斜面には葺石が確認できる。かつて、後円部には、盗掘らしき凹みが確認できたといひ、石棺が存在していたとの伝えもある⁽⁵⁾。

周濠は二重に巡る（第一図）。内濠は比較的幅広くするが、外濠は内濠よりも狭く、十メートル前後の幅になる。内濠外方の堤には、二列に並べられたの埴輪列がある。造出しは西側くびれ部の片方のみに付けられている。遺物は、造出し裾部付近で採集されたようであり、本来は造出し部の上に供献され、あるいは祭祀に使用されたものが、池水に洗われて露呈し、周濠内に転落したものと理解できる。

ウワナベ古墳には、かつて六基の陪塚が存在していた。東側に存在する小型の前方後円墳一基、北側の方墳一基と円墳四基である。北側の五基のうち、現在は方墳の一基しか残存していない。消滅した古墳のうちの二基（大和六号墳）からは、大量の鉄鋌が出土していることは周知のことである。

二、ウワナベ古墳採集の遺物

ウワナベ古墳の遺物には、外堤部出土の埴輪や、造出し裾部で採集された須恵器・土師器および土製品があり、その他には、古墳築造以後の段階の遺物がある。ここでは、造出し裾部で採集された須恵器



第1図 ウワナベ古墳の復元図(註1分献より。
なお、その後の調査により、南外堤との西外濠は
多少ずれることがわかった。註4安井分献。)

を中心に取り上げていこう。採集された須恵器には、蓋杯・高杯・蓋・壺・器台・甕がある。表面が摩耗し、細片化したものが多い。以下、その概要を記す(第2図参照)。

蓋は、平らな天井部にわずかに開く口縁部をつける(一・二)。天井部と口縁部を分ける稜は、にぶくやや太めに仕上げ、口縁端部は丸めに面を作る。天井部は稜部付近を局部的にヘラ削りするが、殆どの

部分は削りを行わずナテている。天井部内面は、丁寧なナテを広範囲に施している。器壁は全体的に厚い。外面および一部内面に赤色塗彩をする。

杯は小型のものが一点ある(三)。直立する短い立ち上がりを持ち、口縁端部は面をもたせ厚く仕上げる。受部も太く鈍い。体部から底部にかけて摩耗がはげしく、削り等の観察は困難である。

高杯には無蓋高杯の二種類がある。四はやや小型品であり、体部の稜は太く付ける。口縁端部は外方に強くつまみ出して細くする。五は四に比較して、深めの丸みをもつ杯部であり稜は太い。体部外面は粗いナテを施す。全体的に粗雑である。内外面とも塗彩する。

六は高杯の脚部である。「ハ」の字形に直線的に開き、幅広い鈍い突線を巡らす。端部は鋭く面を

作り、外面に塗彩する。

甌には小型と中型がある(七〇―一一)。頸部はよくすぼまり、口縁部は曲線的に屈曲するものと、やや直線的延びるものがある。口縁端部は、外方につまみ出しながら平坦面を作り出すものが大半であるが、単純に丸くするものもある。肩部・胴部はよく張り、肩部に波状文を巡らす。底部は内外面ともナデ調整。口頸部の内面の他、外面にも塗彩する。その他、土師器に属する可能性をもち、口頸部の屈曲部を鈍く仕上げたものがある。頸部にハケメを施しているのが特徴である。

一三は壺である。口頸部には突線をつけるが上半部は不明。頸部下段・肩部に波状文を巡らす。口頸部の突線は太く鈍い。体部外面は上半部が横ナデ。下半部はナデの後、指押え状の凹みを有する。外面に塗彩を施す。

一二は大型の高杯、または鉢である。口縁部は杯のように受部が付き、立ち上がる。受部は外方に太く張り出し、この下方にさらに太目の突線を一条巡らす。体部には、三条の回転波状文を施して装飾している。内外面とも横ナデ調整。外面に塗彩する。

一四は高杯形器台である。杯部は浅く逆「ハ」の字形に開き、外面に二条一組二帯の突線で区画し文様帯を作る。突線は太く丸めに作り出すものと、幅広く浅めに鈍く作るもの二者がある。文様帯には、丁寧な波状文を巡らす。台部下方には、カキ目を施した後、二列の列点文を巡らす。列点文の施文方向は上下とも異なる。口縁端部は面を

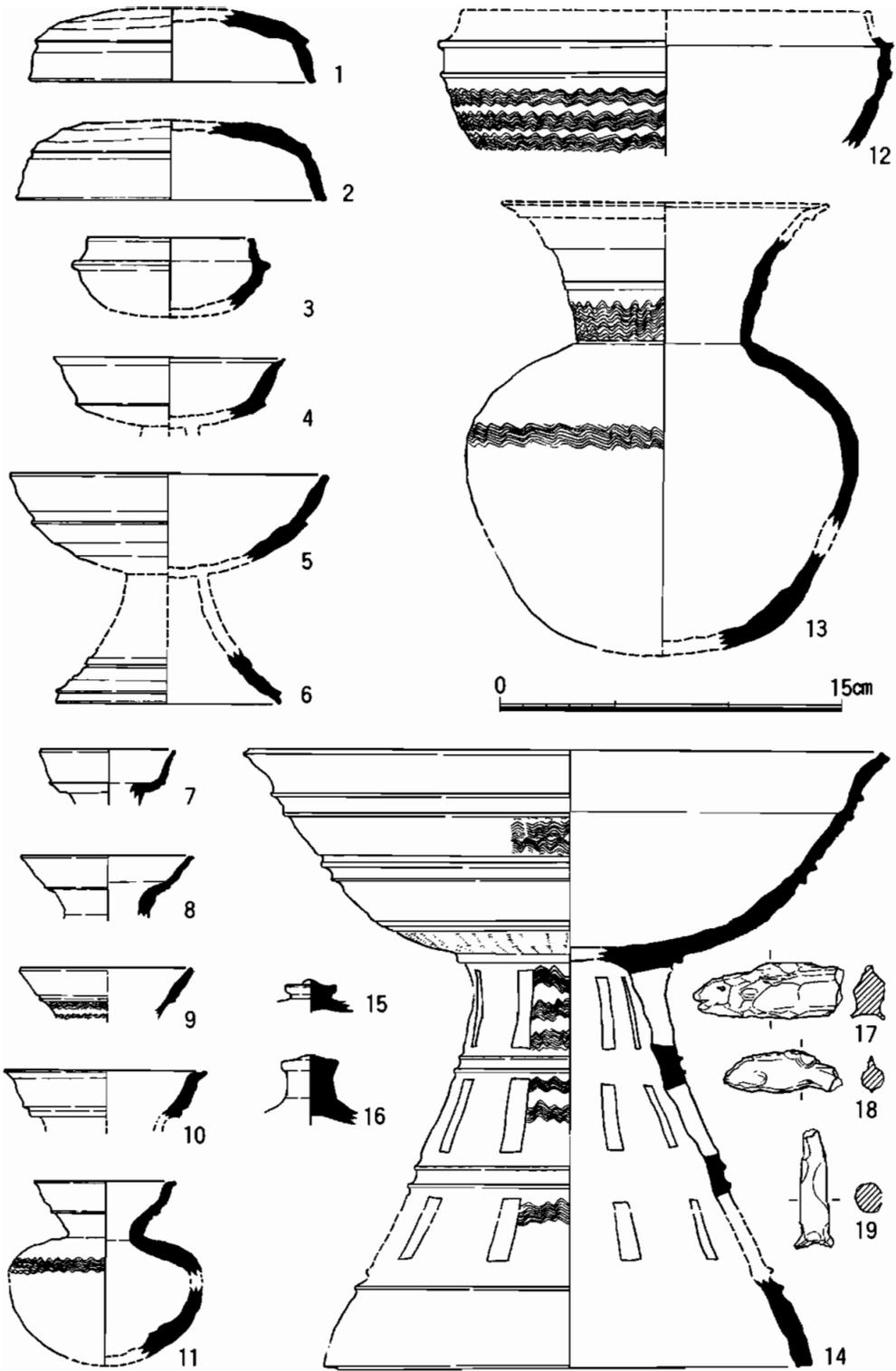
もたせているが、中央部がやくばみ、鈍く仕上げる。脚部と杯部の接合部には、断面三角形の凸帯が付く。底部内面にも、外面と同様のカキ目を施す。

脚部は下半部が復元になるが、直立気味の「ハ」の字形に開く形態である。外面には、二本一組の突線を三帯巡らして区画するが、その前にハケメによって器面を成形しているのが特徴的である。突線は太く丸めに仕上げ、その中に丁寧な波状文を巡らした後に、長方形の縦長の透かしを並列して配している。脚端部は、杯部の口縁端部と同様に、面をもたせている。いずれも外面に塗彩する。

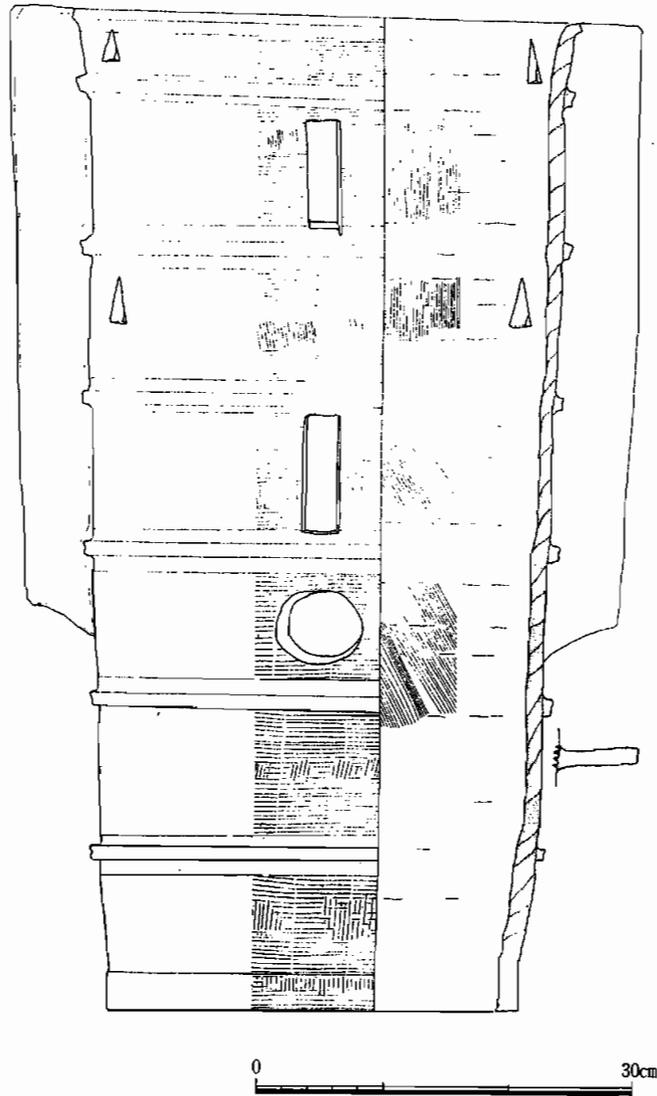
土師器は、小型高杯の脚部や鉢形の器形をした底部片があるが、細片のため不明な部分が多い。一五・一六は蓋のつまみである。その他に手づくねの土製品がある(二七―一九)。二点は魚の頭部を表現したもので、目・口を写実的に表現している。一九は棒状の形態をしており、先端部が尾鰭状に分かれるものである。

埴輪は、鱗付円筒埴輪が主流を占め、その他に円筒埴輪と蓋形埴輪が出土した。鱗付円筒埴輪・普通円筒埴輪ともに六条の凸帯(タガ)を配し、断続する横方向のハケメを施す。焼成はやや軟質のものと硬質に近い良好のものがある。黒斑をもつものはなく、表面に赤色塗彩を行うものがある(第3図)。

以上の遺物について総括すると次のようになる。須恵器は、総体的



第2図 ウワナベ古墳の須恵器・土製品（註1分献より。一部加筆）



第3図 ウワナベ古墳の埴輪（註1分献より）

のが硬質である。しかし、色調の面では、青灰色の須恵器の色調をもつものは微量で、大半が赤褐色系になる。本来の須恵器の還元焰焼成で得られる青灰色の発色に固持せず、赤褐色系に仕上げている点が最大の特徴であろう。

須恵器の内外面にみられた顔料塗彩についても、大半のものに認められた。一部では刷毛塗りの痕跡も残している。塗彩は、すべてが焼成前に施されており、焼成の状況によって、暗赤色や茶褐色・赤褐色になっている。本来の須恵器には無い、こうした塗彩を認め

に厚めに作り、端部・稜等は太めに丸めに、鈍く仕上げるのが特徴である。小型品においては、削り等が顕著ではなく調整が雑になっているが、壺・器台等の波文状は丁寧に施す。形態的には、TK二〇八型式の規格化前の様相を呈することは確実で、太く鈍くしてシャープさをもたない点からも、TK二一六型式の範疇で捉えることは妥当であろう。焼成は一部で軟質（土師質的）のものを含むが、ほとんどのもの

る点も、同遺物の大きな特色である。さらに加えると、甕の頸部や器台の脚部に見られたハケメも、本来の須恵器には見られない技法として留意する必要がある。胎土についても、ほとんどのものが多量の砂粒を含んでいることが窺われ、埴輪の胎土に非常に類似している点も、記しておく事柄である。埴輪は、川西宏幸氏の研究に従えば、IV期のものに相当する。⁽⁶⁾

三、ウワナベ古墳と甕窯生産

以上のように、ウワナベ古墳採集の須恵器は特異なものであった。肉眼観察ではあるが、赤褐色硬質の焼成状態や顔料塗彩・胎土の状態は、埴輪と須恵器の双方において共通、酷似していることがいえる。報告者が「両者があたかも同じ甕窯で焼成したかの感をうける」と論じている様に、非常に類似性の強い遺物である。筆者もほぼ間違いなく同一の甕窯で焼成されたと考えている。

本来、造出し部におかれていた須恵器と、古墳を巡っている埴輪の総量は、比較するまでもなく圧倒的に埴輪が凌駕している。こうした中において、埴輪と須恵器の同時製作や焼成を考えると、当然のことながら、埴輪生産の主導性が予測出来る。さらに重要なことは、前述した須恵器の赤褐色焼成や顔料塗彩の手法の存在である。こうした手法は、旧来からの埴輪製作に用いられる手法であり、須恵器製作には存在していない。これが須恵器に施されているのであるから、埴輪工人が生産全体に大きく関係し、中心となって製作に従事していたことは想像に難くない。大きくみて、埴輪生産を機軸にした生産体制が想定されるのは当然の結果であろう。

しかし一方では、製作された須恵器は、一部において埴輪の手法のハケメ・塗彩を行うとはいっても、あくまでも須恵器本来の技術であ

り、埴輪工人が俄に製作できるものでもなからう。そうすると、埴輪生産を主軸にした体制・組織といえども、ここには須恵器製作に堪能な工人（須恵器工人）も参画して作業していたことにならう。

そうすると、埴輪生産体制の中での須恵器工人の役割は、第一に焼成部門である甕窯の構築と稼動であったと判断される。甕窯の有効的な稼動により、大量の埴輪を焼成していったのであろう。甕窯による埴輪生産は、日本において須恵器生産が成立して以降、各地で採用されていくが、現段階における解釈は、須恵器焼成の甕窯が最初に登場して、同時かそれ以降に埴輪焼成にも使われるようになり、以後普及していったとするのが一般的である。大型・中型・小型等の古墳の種類や勢力等の違いによって、埴輪の量や需要の仕方は変わってくるため、出現の時期や展開は地域によって違いがあるが、その波及と成立には須恵器工人との交流や指導があったと判断できるのである。ウワナベ古墳の状況は、古墳造営の一部としての埴輪生産に、須恵器工人が加担した良好な例と理解できよう。

さらに、ウワナベ古墳では須恵器も同時に製作されていた。量的には多くなく、埴輪的な色調に製作する点は特殊であるが、初期須恵器が古墳の祭祀に多用されることを考えれば、意識的に同時に製作したと判断できよう。すなわち、主たる任務は埴輪生産の援助（甕窯による焼成）であるが、その一部で須恵器の製作も祭祀用容器として目的をもって製作したことになる。

四、須恵器工人の動員

以上のように、ウナナベ古墳においては、特に須恵器の彩色と焼成状態の検討によって、埴輪と須恵器の同時製作・操業が指摘できた。ここでは、同様に埴輪と須恵器工人の共存が窺える事例をとり上げ、こうした須恵器工人の動きについて考えてみよう。

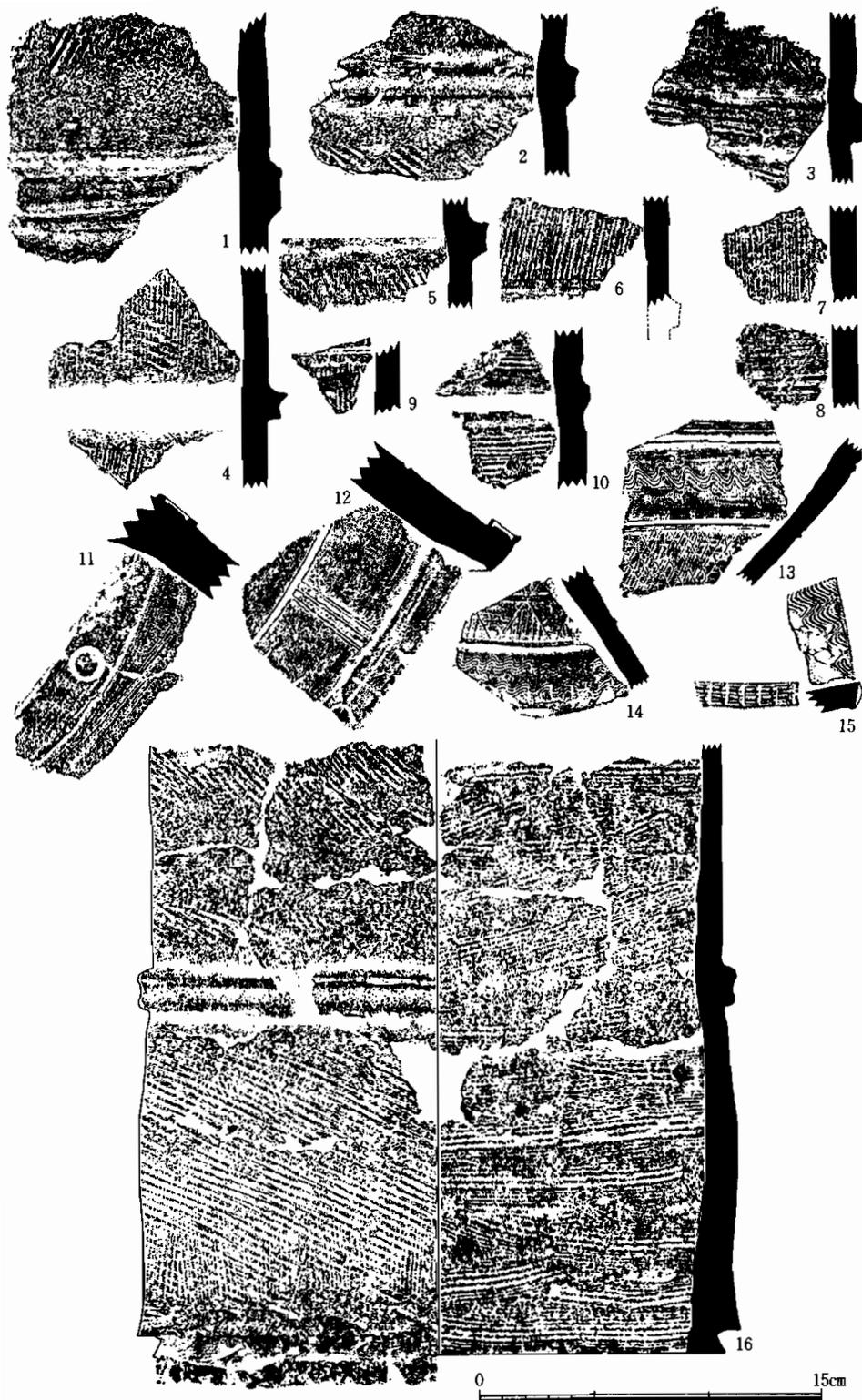
その代表例としてよく知られているのは、大阪府淡輪地域に所在する西陵古墳、宇度墓古墳、西小山古墳であろう。淡輪は言うまでもなく、大阪湾の南端部に位置し、和泉山脈を背後にもつ狭小な地域である。そうした中に、三基の大・中型古墳が近接して築造されている。東側の宇度墓古墳から西側の西陵古墳までは、約一キロメートル離れているが、その中間には西小山古墳が所在している。宇度墓古墳は全長一七五メートルの前方後円墳、西陵古墳も全長二一〇メートルを測る前方後円墳であり、西小山古墳は直径五〇メートルの帆立貝形の古墳である。

この三古墳からは、量的な差はあるものの、いずれも表面に平行叩目文を有し、窖窯で焼成されたと考えられる埴輪が確認されている。⁽⁸⁾さらには、須恵器技法との関連が指摘されている連続の横ハケ(C種横ハケ)も施されている(第四図)。その一方では、焼成は窖窯であるが、外面調整は従来の埴輪の技法であるタテハケや、B種横ハケで構

成される埴輪も存在することから、須恵器の製作技術に堪能な工人と従来の埴輪製作に長けた工人の両者の存在が予測されている。⁽⁹⁾これらの三古墳は、西陵古墳が最初に造られ、ついで宇度墓古墳・西小山古墳への変遷が指摘されているが、後者の二古墳の埴輪には従来の埴輪技法がほとんどなく、須恵器の製作技法を主に認めており、工人体制の動きを検討する上で興味深い資料である。時期的には、西小山古墳より筥描文をもつ須恵器が確認されているため(第四図一三・一四)、TK七三型式あるいは近年注目されてきている大庭寺遺跡の時期に相当すると考えられよう。西陵古墳はこれよりやや遡る時期になる。

ウナナベ古墳と共通する点は、第一に窖窯による埴輪焼成の点である。両者とも、この部門に窖窯焼成に詳しい工人が加わり、実際の操業が行われたと理解できよう。それが須恵器工人であることは、窖窯の要素の他に、ウナナベ古墳では製作された須恵器の存在で窺えるし、淡輪の古墳群では埴輪の製作技術(叩目文)の点で確認できる。ウナナベ古墳の埴輪は、確認されているものでは、断片的なB種横ハケがほとんどであり、須恵器技法との関連性は現段階ではいえないが、将来的に須恵器製作の技術痕跡(叩目文)等が確認できる可能性もあると考えている。

第二に、いずれも大・中型の古墳であることが共通している。西小山古墳はやや小振りとはいっても、五〇メートルを測る中型の古墳であり、その他は大型の前方後円墳である。古墳規模の問題は、埴輪の



第4図 西小山古墳の埴輪と須恵器（註8分献より。1～10・16円筒
11・12衣蓋、13～15須恵器）

需要総量と生産総量の点で大きく関係しており、さらには大型古墳の造営を可能にした権力的な背景や、工人を集結させた体制も両者に準じた形を想像できる。

こうした工人の共存と協業は、古墳の造営における工人の動員として理解して間違いない。特にここでの例は、埴輪生産の部門への須恵器工人の動員に限定でき、こうした生産や体制は、一時的な臨時的な措置かもしれないが、大型古墳の造営体制を考える上でも有効であろう。同様な例は、やや時期が下るが、和歌山県大谷古墳や車架之越古墳、大阪府林一号墳でも叩き目の埴輪が確認されており、こうしたあり方が特例でないことを示している。また、基本的な体制は違っている可能性もあるが、五世紀末以降にはこうした例はかなり確認できるといふように、須恵器生産技術と埴輪生産との親密な交流を読み取ることができる。

五、古墳の築造と地方窯の成立

一方、須恵器と埴輪の同時生産を示す資料としては、前述の古墳資料と並行して、古くから窯跡の資料が知られている。特に東海地方の諸窯は、須恵器と埴輪を同時焼成した例として有名である。初期須恵器の段階の例では、東山一一号窯跡や東山二二八-I(四八)号窯跡、城山窯跡があり、第二の拡散期以降では東山一一号窯跡や下原

窯跡、水神窯跡があり、さらに六世紀代には東山一〇号窯跡の他、多数の窯が知られている。三重県内でも久居窯跡や小杉大谷窯跡、稲生窯跡が埴輪を同時に焼成した窯として知られている。近年では、北部九州の山隈窯跡でも埴輪が検出されており、同時生産の可能性が説かれている。山隈窯跡は北部九州に限らず、日本の中でも大庭寺遺跡やTK七三号窯と並ぶ最古の一群に属するもので、西小山古墳とはほぼ時代である点は特に留意する必要がある。

須恵器窯における埴輪も、前述したウワナベ古墳や淡輪の古墳群と同じように、須恵器と埴輪の専門工人が同一の作業空間において、協業・共存していたとする判断は有効であろう。埴輪生産を基本とした古墳造営と、須恵器生産を機軸にした操業とは、基本的に生産の主体や体制・目的が違ってくるが、埴輪を生産する点、およびそれを古墳に運ぶ点においては相似関係にあるといえる。

このように、古墳および須恵器窯の資料においても、日本における須恵器生産の開始段階から、埴輪を同時生産していることが確認できた。これは、各地の須恵器生産成立の契機や生産体制を考える上で、きわめて重要な事柄である。以下、こうした初期段階の窯跡例から成立の要因を予測出来ることを整理すると、次の通りになる。

(一) 須恵器生産の始業にあたっては、埴輪工人もしくは土師器工人のような技術者の援助が最低限必要であった。したがって、埴輪の同時生産は偶然な出来事ではなく、初期の段階から組み込まれた体制

であったと理解できる。

(二) 須恵器生産の操業の目的が、主に古墳祭祀用の須恵器の確保にあり、同時に古墳を飾る埴輪の生産も行われた。

(三) ウワナベ古墳のように埴輪生産が主体にあり、同時期およびその後も埴輪と須恵器の生産が継続して行われた。

(四) 偶然に同時操業がなされた。

この中で、(四)に関しては、同時操業の類例が相当数存在するたため説明がつかない。(三)に関しても、予測は出来るが、現段階ではその類例が乏しいため、説得力に欠ける。将来的にウワナベ古墳や淡輪地域で検出されれば具体化できよう。(二)については、生産された須恵器の多くが古墳の祭祀として近隣に供給されているのは事実であり、埴輪生産との協業も事実としてあるわけであるから矛盾しない。さらに(一)の体制も加味すれば具体像が描き出されてこよう。したがって、初期須恵器窯の成立の契機は、ひとまず(一)、(二)の要素を重視して見ることにする。それは、古墳・祭祀・埴輪の三要素であり、いずれもが有機的に関係して成立したと考えられる。

さらに推測を重ねるならば、初期須恵器窯の成立は、須恵器への憧れや願望などの個人的な要素も一方であるが、この時代の祭祀、特に古墳の墳丘・造出し祭祀の面での確保と独占において意義を認め、成立したのである。そうすれば、埴輪の同時焼成や工人の協業も、古墳の造営という事業において解釈できるのである。だからこそ、成立以

降において、協業体制が継続した地域も出てくるし、一つの事業(古墳造営)が完了すれば操業が途絶える地域もあるのである。

もちろん、すべてが同時操業ではなく、純粋な須恵器窯として存続するものもある。特に、大阪平野周辺部の須恵器窯では初期段階から顕著であり、成立段階に二系統以上の体制の可能性を考慮しておく必要がある。ウワナベ古墳や淡輪の古墳群のように、埴輪生産への動員や応援は頻繁にあるが、逆のケースは少なく、初出段階に限定出来るかもしれない。いずれにしても、地方の初期須恵器窯成立の多くの場合が、古墳造営を契機として行われたと判断できるのであるが、その契機もいくつかのパターンに分かれる可能性は否定できない。

また、五世紀の末葉から六世紀以降の須恵器窯では、実際の埴輪工人と須恵器工人との違いが求めにくく、須恵器工人が両者を製作した可能性ももたれており、¹¹⁾ウワナベ古墳や淡輪の古墳群および初期須恵器の段階の窯のあり方とは区別して考えなくてはならない。これは、須恵器がしだいに古墳の祭祀用から日常容器へと普及していき、後代も存続する基盤と需要をもっていた手工業部門であることと密接に係する。

おわりに

小稿では、これまで述べてきたように、奈良県ウワナベ古墳の須恵

器と埴輪、およびそれに関連する古墳や窯跡の検討から、地方窯の成立と古墳造営との関連について述べてきた。その結果、第一の拡散とした地方窯の成立は、その多くが古墳造営一つの契機として行われると判断した。それは、須恵器そのものが初期においては祭祀用具であり、古墳造営の祭祀と深い関係にあるため、古墳造営に必要な須恵器の生産が求められた。かつ窖窯焼成は、古墳の施設である埴輪の生産にも威力を発揮するため、いちはやく採用される結果になった。いふなれば、古墳造営の一部門としての性格があるため、埴輪生産を主体にした形で行われた地域もあるし、独立した須恵器（埴輪兼業）窯として成立した地域もある。いずれにしても、初期には古墳造営に関連する埴輪工人の存在があり、窖窯による埴輪生産と須恵器生産をも可能にしたのであろう。

須恵器窯成立の初期は多系譜で突発的な状況が判断できるが、第一の拡散期の地方窯は、ある程度規則性をもって成立し、偶発的に各地に分散したものは少ないと考えられる。もちろん、突発的に成立するものも一部ではあるが、それは例外である。古墳時代の社会組織の中で組み立てる方向性で行けば、その法則性にのっとって位置付けなくてはならない。つまり、地方窯の成立は中央から地方への政治的な関係を基本として成立したと理解出来るし、そうした中で前述した須恵器・古墳・祭祀・埴輪の有機的な関係も位置づける必要があると考える。

小稿では、個々の窯跡の詳細な分析や、須恵器と埴輪の供給された古墳の関係、さらには地域毎の須恵器生産の推移等、多くの検討が不足している。また、須恵器・埴輪工人の組織の問題も、これまでの埴輪研究の成果を考慮する必要があるし、埴輪工人と土師部との文献学的な対比も関わってこよう。筆者はかつて、地方の須恵器窯の成立が古墳の造営を契機することから、それを司る集団を提唱したことがある（「葬送儀礼集団」¹³）。こうした集団が地方に派遣され、在地の技術者や労働力を動員して編成され、古墳の造営とともに窖窯の築造も行われると解釈した。したがって、地方の生産もこの集団の役割の一部として捉えた。その内容は今後の研究に期するが、こうした古墳造営集団（「葬送儀礼集団」）は、まさしく土師部と関連する部分が多いのである。前述した多くの問題点も含めて、今後の課題として記しておきたい。

〔付記〕小稿を記すにあたり、ウワナベ古墳の遺物の表見に際しましては、奈良国立文化財研究所毛利光俊彦、巽淳一郎、杉山 洋の各氏にご配慮いただきました。記して謝意を申し上げます。

註

（1）奈良国立文化財研究所「ウワナベ古墳東外埴」（「平城宮発掘調査報告」

- (2) 植野浩三「西日本の初期須恵器―三ツ城古墳の須恵器を中心にして―」
 【奈良大学紀要】第九号 一九八〇年。
- (3) 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 一九八一年。増子康真「尾張における初期須恵器生産の形態の検討」【信濃】第三三卷六号 一九八〇年。
- (4) 末水雅雄他「奈良市史」考古編 一九七一年。奈良国立文化財研究所
 「ウワナベ古墳東外堤」(平城宮発掘調査報告)VI 一九七四年。伊藤勇輔
 「ウワナベ古墳外堤」奈良県古墳発掘調査報告I 一九七六年。伊藤雅文
 「ウワナベ古墳」奈良県遺跡発掘調査概報 一九八六年。安井宣也「ウワ
 ナベ古墳外堤の調査」奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成三年度 一
 九九二年。
- (5) 末水雅雄他「奈良市史」考古編 一九七一年。
- (6) 川西宏幸「円筒埴輪総論」【考古学雑誌】第六四卷第二・四号 一九七
 八・一九七九年。
- (7) 前掲註(1)。
- (8) 川西宏幸「淡輪の首長と埴輪生産」【大阪文化誌】第二卷四号 一九七
 七年。
- (9) 前掲註(8)。
- (10) 拡散の概念は、田辺昭三氏が提唱した地方窯の拡散を継承するが、第
 一・第二の拡散は、拙稿「日本における初期須恵器生産の開始と展開」
 【奈良大学紀要】第二二号 一九九三年三月刊行予定で、記している。こ
 参照いただきたい。以下、小稿で用いる拡散の概念は、これに従っている。
- (11) 鈴木俊則・小畑頼孝「豊橋市牟呂町 三ツ山古墳」【ホリデー考古】二
 号 一九八四年。
- (12) 近年、愛媛県において初期須恵器段階の窯跡の可能性をもつ資料が確認
 されつつあるという(市場南組窯跡)。窯跡とすれば、以前より、確認さ
 れていた出作遺跡の遺物と類似し、陶器窯とは系譜を異にする可能性があ
 る。長井数秋「松山平野の須恵器編年」【愛媛考古学】第一二集 一九九
 二年。
- (13) 前掲註(2)で示した。